ヒューマン・ケア研究　第12巻　第２号
2012年２月　82-97頁

Journal of Human Care Studies Vol. 12 No. 2
February 2012, pp 82-97

原　著

合意を目的とするコミュニケーションに及ぼす空間的ジェンダーと性の影響

奥野　雅子*

Effect of spatial gender and sex on consensual communication

Masako Okuno*

Abstract

Aims: The purpose of this study was to investigate the effect of spatial gender and sex on consensual communication. Spatial gender in this study was defined as gender being expressed in the here and now in communication.

Methods: Two experiments were conducted by focusing on women's language as a barometer of femininity in communication. In the first experiment, university students were asked to persuade pseudo-patients to give their consent to take medicine as directed in the role-plays. In the second experiment, pharmacists as specialists were asked to persuade pseudo-patients using two linguistic approaches; one of which was to use women's language with great frequency, while the other actively avoided using women's language.

Results: The results of these studies suggested that sex didn't affect consensual effect and that the decrease in women's language possibly enhanced consensual effect.

Conclusion: These results revealed that using women's language, which involved politeness and vogue expressions, induced a decrease in aggressiveness regarding information transmission. It was also suggested in the study that the degree of femininity and masculinity in communication influenced the receiver's attitude.

Key words: spatial gender, sex, consensual communication, consensual effect, women's language.

問題と目的

性差医療
―ジェンダー・センシティブ・メディスン―

心理療法や医療などの臨床場面では、専門家が患者やクライアントに合意を得る際に、性差やジェンダーの影響を考慮せずに解決を図ることは難しい。ジェンダーとは、生物学的な性のあり方を意味するセックスに対して、文化的・社会的・心理的な性のあり方を示し、「男／女はこうあるべき」という社会的枠付けや「男／女らしさ」といった「らしさ」を意味する。セックスは自然が生み出したものであり、ジェンダーは、人間社会や文化によって構成された性である（伊藤・國信, 2004）。

*　安田女子大学文学部心理学科（Department of Psychology, Faculty of Letters, Yasuda Women's University）

受稿2010.8.26　受理2011.10.13

つまり、ジェンダーはセックスに対する社会的意味づけとされる。このようなジェンダーやセックスを考慮した医療は、性差医療あるいはジェンダー・センシティブ・メディスンと呼ばれ、1990年代にアメリカを中心に広がり、2003年に日本で正式に始まった（天野, 2004）。ジェンダー・センシティブ・メディスンは男女の生物学的性差、社会的な男女の位置付けと相互の関係性、男女それぞれにみられる特有の疾患や病態などの医学的な実証に基づいて行われている（天野, 2004）。この分野はアメリカに10年遅れたが、現在では各地に開設された女性専用外来において顕著な発展を見せた。この女性専用外来では、女性患者の視点が尊重されるため、女性の医師が担当していることが多い。しかし、実際には女性専用外来を男性医師が担当している医療機関も少なくなく、女性の患者やクライアントには女性の専門家の方がより適切な援助ができるということは実証されていない。また、患者の立場からみる専門家の支援の効果は、専門家の性差のみに帰属しているわけでは決してない。同性の専門家を希望するクライアントは、異性の専門家に対する生物学的性差そのものに違和感を覚えているのではなく、専門家が生物学的性差を社会的にどのようにとらえているかを感じ取るのではないかと考えられる。すなわち、女性の患者やクライアントが専門家を選ぶ際には、生物学的性差より社会的性差であるジェンダーに対する感受性が高いのではないかと推測される。したがって、ジェンダー・センシティブ・メディスンは、専門家とクライアントのコミュニケーションによって影響されうるものであるといえる。

本研究で取り扱うジェンダーの概念は、まさにその場で行われているコミュニケーションの中で表出される女性性、男性性であり、それを「空間的ジェンダー」（長谷川, 2006）と定義する。この捉え方によると、ジェンダーは過去の生育歴で決定付けられ所有するような固定的な思考や態度のパターンではない。時間軸を含むような四次元は想定せず、今ここにある三次元空間にジェンダーが表現されるという、ジェンダーの動きや変化を許容する捉え方をする。つまり、ジェンダーは持つものではなくコミュニケーション行動である。「空間的ジェンダー」についての詳細は後述する。そこで、空間的ジェンダーの表出としてコミュニケーションの性差に着目する必要がある。

コミュニケーションの性差

コミュニケーションの性差に関する先行研究において、まず、非言語領域では、女性は非言語コミュニケーションを理解することに優れていることが報告された（Rosenthal et al., 1979; Hall, 1984）。これは、女性は言語使用の不十分な子どもの非言語コミュニケーションを理解する必要性が多く、受身的な行動を社会的役割として期待されているため、非言語行動の観察力が大きいことが考えられる（大坊, 2001）。また、女性は男性に比べて、視線を多く向けることが明らかにされ（Exline, 1963; Exline, Gray & Schuette, 1965）、日本でも同様な結果が確認されている（大坊, 1982; 大坊, 1983）。会話している相手に対し女性が男性より多くの視線を向けることは、女性は社会的場面における視線の持つ意味を重視しているからではないかと考えられる（石川, 2006）。言葉中心の主張的な役割が期待されてきた男性に対して、協調性、他者への配慮、感情的受容が期待されてきた女性が、感情的敏感さをより発揮しているための特徴と考えられる（大坊, 2007）。

発言時間に関しては、初対面の男性と女性という組み合わせで男性が女性に比較して発言時間が長いことが示された（江原・好井・山崎, 1993; 内田, 1993）。視線と発言時間との関連についての研究でも、初対面の男性と女性の会話場面において、男性は女性に対してあまり視線を向けずに

発言に終始する傾向があり、女性は視線を長く多く向け、発言は少ないという特徴があった（大坊, 1982）。しかし、男性は親密度が高いと発言も視線も活発になり、女性はそれと反対のコミュニケーションになることが報告されている（大坊, 1992）。

言語コミュニケーションの違いでは、アメリカでは「女性語」と言われる女性特有の言葉使いがあり、女性が社会的に低い地位に置かれていることが言語に現れていることが指摘された（Lakoff, 1975）。これまでの日本語の歴史の中でも、女性が用いる言葉は「女ことば」と呼ばれ、丁寧さと間接形を主な特徴として助詞、助動詞、文末表現などに表出されると言われている（中村，2007; 宇佐美，2010）。アメリカの「女性語」は日本の「女ことば」とほぼ同一の意味を表現すると考えられる。日米における「女性語」の対応の例として、英語の"you know" "you see" "I'd say" "I'd think"という表現は、終助詞「ね（え）」に相当する（Martin, 1975）。平田（2004）は、終助詞「ね」や「よ」は女性が婉曲表現のひとつとして多用し、特に男性が「ね」を多用すると女性的な印象になることを示した。また、言葉には常に「権力性」が付きまとうことも指摘された（平田, 2004）。このように、日本語は女性に女らしさ求め、女性の行動を制限する言語であり、女性の低い地位を反映しているとされた（寿岳, 1979）。一方、石丸（2001）はLakoff（1975）が示した「女性語」の特徴を日本社会での男女の談話資料に基づいて検討し、男女が平等な立場で参加する政治座談会では、女性話者の発話にLakoff（1975）が指摘した「女性語」の特徴は観察されないことを報告した。これらの研究は、女性の社会的地位と言語を結びつけて研究するという視点で、フェミニズムの立場による女性語研究の先駆けとなった。

さらに、別の見方もある。井出（1985）は、言語の性差を社会的地位の差であるとするフェミニズムの立場とは別の観点から、日本においては女性が男性より丁寧な言葉使いをするのは、地位の差によるものではなく、役割の差によるものであると述べた。Tannen（1991）も、女性が丁寧な言語表現を用いることを、社会的地位とは直接結びつけず、男性と女性が異なる言語を使用するのは、異なる文化に属しているからであると説明した。つまり、男性は、地位を重んじ、独立性を重視する世界に属し、女性は人と人とのつながりを重視する世界に属すことを意味しており、社会における支配的あるいは従属的な立場にあるということではないと述べた（Tannen, 1991）。

最後に、被影響性（influenceability）の性差について取り上げる。被影響性とは社会的影響に対する感受性や影響の受けやすさを示す。被影響性の性差についての先行研究では、女性が男性よりも被影響性が高いと報告されてきた（McGuire, 1968; Eagly & Carli, 1981）。東（1997）も、女性は自分の意見を変えるように説得されやすく、暗示を受けやすく、同調しやすいと述べた。また、同意への圧力（自由への脅威）が大きい場合、男性は抵抗を示すが、女性は内面的にはリアクタンス反応を生起しながらも外面的には同調傾向を示すことが報告された（今城, 1984; 上野, 1994）。ところが、男性は女性に適した問題に対して説得されやすく、女性は男性に適した問題に対して説得されやすいことが明らかにされたため（Cacioppo & Petty, 1980; Karabenick, 1983）、女性の方が被影響性が高いとは一概にはいえないことも示唆されている。

本研究におけるジェンダーの取り扱い —コミュニケーションに表出する空間的ジェンダー—

ジェンダーとは生物学的性ではなく、文化的・社会的・心理的な性のあり方であり、社会や文化によって構成されるものであることはすでに述べ

た（伊藤・國信, 2004）。一方、女性性、男性性といったジェンダーを過去の生育歴で決定されるようなパーソナリティの中に見出すのではなく、今ここに行われているコミュニケーションの中からジェンダーが表出するという観点がある（長谷川, 2006）。ジェンダーは表現されて初めてその機能が働くものであり、それを時間軸を含む四次元ではなく、今ここにある三次元空間において扱うことができる。この捉え方は、長谷川（2006）が「空間的ジェンダー論」として提唱するものであり、“男性的にみえる男性でも周りの状況によってはむしろ女性的にもなりえる。女性についても同様であると考えうる”という立場である。つまり、ジェンダーが今ここに展開されているコミュニケーションの中で変化するという、ジェンダーの可変性、相互作用性、現在性に着目している。この「空間的ジェンダー論」は、時間軸にそった発達心理学的視点とは異なり、システム理論を基盤としたコミュニケーション理論やシステム論的家族療法の見方に基づいている。これらの理論は「人間コミュニケーションの語用論」（Watzlawick, Beavin & Jackson, 1967）で述べられており、コミュニケーションの送り手と受け手は一連のシステムを形成し、送り手は受け手を意図する方向に拘束するが、受け手の反応により送り手の行動も拘束されている、という円環的な関係と捉えることを意味している（奥野, 2008）。このような視点に立つと、空間的ジェンダーはコミュニケーションの相互作用の中で作り出され、変化しうると捉えられる。

一方、コミュニケーションの相互作用に着目し、メッセージの関係性に関わるコミュニケーションはマネージメント・コミュニケーションと呼ばれ（長谷川, 2003）、会話の内容ではなく、その場のやり取りを指示する行為である。言語では「終助詞」、「間投詞」など、非言語では「反応を求める頭の動き」、「反応を示す頭の動き」、「視線」、「笑顔」などがある。これらのコミュニケーションは会話の相互作用を制御するとともに、使用頻度が性差によって異なることが報告されている（石川, 2006）。したがって、このようなマネージメント・コミュニケーションの用い方が空間的ジェンダーの表出に含まれることになるといえる。

本研究の目的

性差医療の立場から臨床場面で性やジェンダーをどのように考慮すればより適切に患者を支援できるかを明らかにすることは、質の高いヒューマン・ケアを提供する上では重要だと考えられる。本研究では、性差によってコミュニケーションが異なるという視点（Rosenthal, Hall, DiMetteo, Rogers & Archer, 1979）を踏まえ、性や空間的ジェンダーが合意を目的としたコミュニケーションおよび相互関係にどのように影響するかを検討する。ここでは、まさにその場で行われているコミュニケーションの中で表出される女性性、男性性に焦点を当てる。そこで、女性性と男性性を示す指標として「女性語」に着目し、「女性語」を用いた会話のやりくりが相手の態度に与える影響を検討する。「女性語」は話の内容というより、どのように話すかといった会話のマネージメント的側面に関わるものである。「女性語」の使用は女性性が高まっている指標のひとつであるため、コミュニケーションにおけるジェンダーの表出を「女性語」の使用を基準にして検討を行う。さらに、これまでの先行研究を踏まえ、男女の専門家のコミュニケーションの特徴について「反応を示すうなずき」「反応を求める頭の動き」「視線」「発言時間」を比較検討し、性や空間的ジェンダーの差と合意を目的としたコミュニケーションとの関連性を明らかにする。

研究 1

目　的

専門家役として大学生を実験参加者として性と空間的ジェンダーが、合意の度合いと他のコミュニケーションに及ぼす影響を探索的に検討する。なお、言語に表出する女性性の指標として「女性語」に着目する。

方　法

実験参加者

初対面の21組42名。

実験参加者の専門家役はA大学薬学部4年生あるいは大学院生21名（年齢22～25歳；男10名、女11名）、患者役は既婚女性21名（年齢36～56歳，平均±標準偏差43.8±6.5）である。なお、患者役には薬学部生やその卒業生を含まない。

実験手続き

患者役に指示通り薬を飲まないコンプライアンスの悪い胃潰瘍患者の役を演じてもらい、薬を指示通り飲むよう専門家役に8分間話してもらった。実験終了後に患者役は、納得できたと感じたかどうかを7件法で質問紙に記入するように求められ、質問紙の評定を合意度得点として、7点（完全に納得できた）から1点（全く納得できない）まで得点化した。

分　析

実験場面をデジタルビデオに収め、実験参加者が会話を終了するまでの最後の2分間を分析対象とした。両者の会話をすべてプロトコルに起こし、専門家役の「女性語」の数をカウントした。その後、ビデオを見ながら専門家役の非言語コミュニケーションをプロトコルに記入して数をカウントし、発言時間を計測した。「女性語」と非言語コミュニケーションのコーディングは以下のように行った。

「女性語」のコーディング

Lakoff（1975）が示した「女性語」は、丁寧で間接的であることを特徴とした日本の「女ことば」にほぼ一致すると捉えられるため（中村, 2007; 宇佐美, 2010）、対照分析の基準として「意味の共通性」という観点から（メイナード, 2002）、石丸（2001）が12種類に集約したものをTable 1に示す。

この特徴に基づき、「女性語」のコーディングを以下のように行なった。

①誇張する表現：「とっても」「本当に」など
②断定を避けるための垣根表現：「思う」「かもしれない」など
③付加疑問文：「ですよね？」など
④平叙文に上昇調のイントネーション：「様子を見る？」など
⑤間接的依頼文：「飲んでくれますか？」「お願いします」など
⑥女性独特の間投詞：「あらー」など
⑦埋め言葉：「えーと」「あのー」「あー」「ね」「ですね」など
⑧細やかな色彩表現
⑨女性特有の形容詞
⑩強調した強勢：「すごく」「必ず」「やっぱり」「是非とも」など
⑪人間関係の維持を重視する強調的言葉使い：「とてもたいへん」など
⑫規範的な言葉：「心配しない方がよい」など

非言語コミュニケーションのコーディング

非言語コミュニケーションのコーディングは、伊藤（1991）、メイナード（2002）の定義を参考に以下のように行った。

①反応を示すうなずき：相手が発話している最中や発話を終えた直後などに首を縦に振るもの。はっきりと正常位置から下を向きすぐにもとの位置にもどすもののみで、下を向いてから上を向くまでの間に時間が経過するもの

Table 1　女性語の特徴

女性語の特徴	例
①　誇張する表現の多用	just, really, very very, etc.
②　断定を避けるために垣根表現の多用	I wonder, I guess, I think, etc.
③　付加疑問文の多用	Sure is hot here, isn't it?
④　平叙文に上昇調のイントネーションを付加	A : When will dinner be ready? B : Oh, around six o'clock?
⑤　命令文の使用を避け、間接的依頼文の多用	**Please** close the door. **Will you** close the door? **Won't you** close the door?
⑥　女性独特の間投詞の使用	**Oh dear**, you've put the peanut butter in the refrigerator again.
⑦　埋め言葉の多用	you see, you know, well, etc.
⑧　細やかな色彩表現の多用	mauve, aquamarine, beige, etc.
⑨　女性特有の形容詞の使用	adorable, charming, sweet, lovely, etc.
⑩　強調した強勢の使用	It was a **BRILLIANT** performance.
⑪　人間関係の維持を重視する強調的言葉遣い	A : I saw an accident this morning. That was **REALLY TERRIBLE**. B : Yes, accidents are terrible, isn't it? And was it serious?
⑫　規範的な言葉の使用	A : Oh, you have nothing to worry. A : Oh, you mean you don't have anything to worry about?

は含まない。一度に2回以上連続して振っても1回とみなす。

②反応を求める頭の動き：「～ですよね」「～ですか」などの言葉に随伴するような質問、相手の同意や反応を求める言葉とともに表わされるうなずき。あるいは、発話の語尾とともに示されるうなずき。

③視線：相手の胸から顔までの範囲を見ている行動。顔が相手の方に向けられていても上や下を見ているものは含まない。

④発言時間：1人の話者が話す権利を行使している時間。このときに聞き手が送る短い表現であるあいづちは含まない。

なお、無作為に選んだ2組について、2名の分析者が独立して上記の分析を行なったところ、分析者間の一致度が0.84と高かったため、結果的には1人の分析者が分析を行なった。また、「女性語」のコーディングを行ってカウントした後、平均値を基準（平均±標準偏差11.7±4.8）にして使用の多い群（平均±標準偏差15.6±2.6、女性5名男性4名）と少ない群（平均±標準偏差8.8±2.1、女性5名男性7名）の2群に分けた。

従属変数に患者役の「合意度得点」、専門家役の非言語コミュニケーションである「視線」、「反応を求める頭の動き」、「反応を示すうなずき」、「発言時間」に対して、専門家役の性（男／女）×女性語（多／少）の2要因の分散分析を行った。

結　果

専門家役として大学生を実験参加者にした場合、男性と女性の間で専門家役による「女性語」の使用についてt検定で比較したが、有意差はなかっ

た。

専門家役の性差と女性語が患者役に与える影響に関しては、患者役が評定した「合意度得点」について、専門家役が用いる「女性語」の主効果が有意傾向（F（1, 17）＝3.95, p＜.10）であり、専門家役の「性」の主効果は有意ではなく、交互作用はみられなかった。この結果をTable 2に示す。

専門家役の性差と女性語が専門家役のコミュニケーションに与える影響に関して以下に記す。まず、専門家役が用いる「反応を示すうなずきに」ついて、専門家役の「性」の主効果が有意（F（1, 17）＝6.33, p＜.05）であり、専門家役が用いる「女性語」の主効果はなく、交互作用が有意であった（F（1, 17）＝4.74, p＜.05）。有意な交互作用がみられたことから、単純主効果の検定を行なった。その結果、「反応を示すうなずき」については、「女性語」が多い群における「性」の単純主効果が有意であり（F（1, 17）＝9.70, p＜.01）、男性において「女性語」の単純主効果が有意傾向であった（F（1, 17）＝3.23, p＜.10）。

次に、専門家役の「視線」について、専門家役が用いる「女性語」の主効果が有意であり（F（1, 17）＝13.91, p＜.01）、専門家役の「性」の主効果がなく、交互作用が有意傾向でみられた（F（1, 17）＝3.78, p＜.10）。交互作用が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行なった。その結果、「視線」については、「女性語」が多い群における「性」の単純主効果が有意であり（F（1, 17）＝4.98, p＜.05）、男性において「女性語」の単純主効果が有意であった（F（1, 17）＝16.24, p＜.01）。

さらに、専門家役の「発言時間」については、「女性語」の主効果が有意であり（F（1, 17）＝5.24, p＜.05）、専門家役の「性」の主効果がなく、交互作用はみられなかった。専門家役が用いる「反応を求めるうなずき」に関しては、主効果が有意ではなく、交互作用もみられなかった。これらの結果をTable 3に示す。

考　察

患者役が評定した合意度得点について、専門家役の大学生を実験参加者とした場合、専門家役の男性と女性の間で性差がみられなかったことから、同性の専門家の方が合意を得やすいとはいえなかった。一方、女性性を高める「女性語」を専門家役が多く用いると合意を得にくくなる傾向が示された。これは「女性語」が含有する確定的な表現を避け、丁寧かつ婉曲な表現が、受け手には情報伝達の積極性を低下させるよう作用したからではないかと考えられる。

専門家役によるコミュニケーションの性差における特徴については、まず、「反応を示すうなずき」を女性が多く用いていることが明らかになった。これは石川（2006）が行った質問紙による「カップル」のコミュニケーションの調査結果と一致した。「女性語」と「性」に交互作用がみられたことから単純主効果の結果より、「女性語」

Table 2　性差と女性語高低による患者役への影響
―専門家役として大学生を実験参加者とした場合―

	要因		平均値	SD	主効果	交互作用
合意度得点	性差	男性	5.18	1.54		
		女性	5.00	1.63	0.00	
	女性語	高群	4.33	1.73		
		低群	5.67	1.15	3.95†	0.04

† p＜.01

Table 3　性差と女性語高低による専門家役への影響
―専門家役として大学生を実験参加者とした場合―

	要因		平均値	SD	主効果	交互作用
反応を示すうなずき	性差	男性	14.82	4.85		
		女性	20.30	7.21	6.33*	
	女性語	高群	17.33	8.85		
		低群	17.50	4.62	0.13	4.74*
反応を求める頭の動き	性差	男性	22.00	8.26		
		女性	23.70	8.92	0.18	
	女性語	高群	23.67	8.96		
		低群	22.17	8.31	0.11	0.11
視線	性差	男性	85.86	28.64		
		女性	90.84	15.29	2.03	
	女性語	高群	72.53	24.76		
		低群	100.00	12.26	13.91**	3.78†
発言時間	性差	男性	67.45	18.01		
		女性	64.80	22.75	0.59	
	女性語	高群	76.56	20.84		
		低群	58.42	15.88	5.23*	0.95

†p＜.01　*p＜.05　**p＜.01

を多く用いる場合に、女性の方が男性より「反応を示すうなずき」が多く、男性は「女性語」を少なく用いる時に「反応を示すうなずき」が多くなる傾向が示唆された。この結果は、言語側面で女性性が高い女性は非言語側面でも女性性が高いことを示し、男性に関しては、言語側面で女性性が低い男性がそれを補完する形で非言語側面において女性性を高めていることを示唆している。

「視線」については、「女性語」を用いない時に「視線」の方向付けが増加した。これも、「反応を示すうなずき」が増加した場合と同じであり、婉曲表現や丁寧な表現を少なくして断定的な表現を使用した時に関係を保とうとして「視線」を方向付けた可能性がある。このとき、「女性語」と「性」に交互作用がみられたことから単純主効果の検定より、「女性語」を多く用いる場合に、女性の方が男性より「視線」の方向付けが多く、男性は「女性語」を少なく使用するときに視線の方向付けが増加することが示唆された。この結果から、言語側面で女性性が高い女性は非言語側面でも女性性が高いことを示し、男性に関しては、言語側面で女性性が低い男性がそれを補完する形で非言語側面において女性性を高めていることが認められる。これは「視線」と「反応を示すうなずき」が関係性を保つという同じ機能を果たし、それらをどう活用するかについて男女で異なることを意味する。合意を得る目的の送り手が女性である場合は言語と非言語の両側面において“相称的”[註1)]に女性性を高めるが、男性の場合は女性性と男性性を“相補的”に働かせることが推測される。

「発言時間」については、「性」では有意差が

註１）「相称的」はふたつのコミュニケーションが同じ方向に働く状態であり、次行の「相補的」はふたつのコミュニケーションが反対の方向に働く状態を意味する。「人間コミュニケーションの語用論」（Watzlawick, Beavin & Jacson, 1967）では、「全てのコミュニケーションの相互作用はシンメトリーかコンプリメンタリーのどちらかであり、前者は同一性、後者は差異に基づいている」と述べられている。本論では“シンメトリー”を相称的、“コンプリメンタリー”を相補的と訳した。「人間コミュニケーションの語用論」では“シンメトリー”はパートナーがお互いの行動を反射する傾向を持ち、“コンプリメンタリー”は一方のパートナーの行動が他方の行動を補いあいながら、お互い異なった行動を形成することであると説明されている。このような関係性の捉え方はBateson（1935）が最初に行ったものであり、その後のBateson（1972）の著書「精神の生態学」では“シンメトリー”は対称的と訳されている。

なかったことから、男性は女性に比べて発言時間が長いという先行研究の知見とは一致しなかった。専門的立場に身を置いて合意を得ようとする状況と初対面の男女のコミュニケーションの一般的特徴は異なるといえる。これは、越道（2005）が男女の会話が雑談と問題解決時では異なるコミュニケーション方略を用いることを示唆した研究からも裏付けられる。一方、「女性語」が多い時に「発言時間」が増加したことから、断定を避けるための垣根表現、間投詞、終助詞や埋め言葉を多用したことで、発言時間が引き延ばされることになったと考えられる。

合意を得るために会話を行った専門家役の大学生では、男性と女性の「女性語」の使用について有意差がなかったことは、女性が常に「女性語」を多く用いているわけではないことを示唆している。

本研究の課題は、専門家による合意を目的とするコミュニケーションについて大学生を被験者とし専門家役を演じてもらったことであり、専門家のコミュニケーションスタイルを100パーセント再現しているわけではないといえる。また、性差と「女性語」の使用について関連がなかったことから、女性語を操作することによって空間的ジェンダーに変化を与え、コミュニケーションの効果について検討を行う必要がある。

研究 2

目　的

研究 1 では、合意を目的とするコミュニケーションにおける性差と、空間的ジェンダーという視点から大学生を専門家役として検討を行った。本研究では、現職の専門家を実験参加者とし、空間的ジェンダーを操作する。終助詞を多く用いることが誇張表現、垣根表現、間接的依頼、埋め言葉などの女性語を増加させることになるため（奥野, 2004)、本実験では終助詞操作によって「女性語」を増加、あるいは減少させる条件を設定する。空間的ジェンダーの差異に焦点を当て、合意を目的とするコミュニケーションにおける性と空間的ジェンダーが合意度に与える影響を検討する。また、他のコミュニケーション指標との関連もあわせて比較検討する。

方　法

実験参加者

初対面の 24 組。

現職の薬剤師が 6 名（男女各 3 名、年齢 27～39 歳、平均±標準偏差 30.5 ± 4.5）と患者役の既婚女性 24 名（年齢 35～57 歳、平均±標準偏差 44.1 ± 6.3）である。薬剤師 1 名が 4 名の患者役と会話を行い、初対面の 24 ペアーを設定した。なお、患者役には薬学部生やその卒業生を含まない。

実験手続き

患者役に指示通り薬を飲まないコンプライアンスの悪い高血圧患者の役を演じてもらい、薬剤師に 7 分間会話をしてもらった。同じ内容を女性語のひとつとされる終助詞「ね」をなるべく用いる条件と用いない条件で会話してもらい、女性語の使用を全体的に増減させる条件をつくった。1 人の薬剤師はそれぞれ異なる患者役 4 名を担当し、2 名が女性語を増加させる条件、2 名が減少させる条件とした。したがって、各条件は患者役 12 名とした。実験後に患者役が合意度尺度（奥野・長谷川, 2008）と専門性尺度（奥野・長谷川, 2008）の質問紙に 7 件法で記入した。

分　析

実験場面をデジタルビデオに収め、実験参加者による会話開始 2 分経過後からの 2 分間を分析の対象とした。会話をすべてプロトコルに起こし、薬剤師が用いる「女性語」の数をカウントした。その後、ビデオを見ながら薬剤師の非言語コミュ

ニケーションをプロトコルに記入して数をカウントし、発言時間を計測した。なお、「女性語」と非言語コミュニケーションのコーディングは研究１と同じである。

従属変数に患者役の「合意度」と「専門性の認知」、専門家として薬剤師の非言語コミュニケーションである「視線」、「反応を求めるうなずき」、「反応を示すうなずき」、「発言時間」に対して、専門家の性（男／女）×女性語（多／少）の２要因の分散分析を行った。

結　果

実際の専門家を被験者とした場合、終助詞の操作を加えることで男性と女性の両方に女性語を増加させる条件をつくったが、男性と女性の間で「女性語」の使用についてｔ検定の比較により有意差はなかった。

専門家の性差と女性語が患者役に与える影響に関しては、患者役が評定した「合意度」について、「女性語」の主効果が有意傾向であり（$F(1, 16) = 3.53$, $p < .10$）、専門家の「性」の主効果はなく、交互作用はみられなかった。「専門性の認知」については主効果が有意ではなく、交互作用もみられなかった。これらの結果をTable ４に示す。

専門家の性差と女性語が専門家のコミュニケーションに与える影響に関して以下に記す。まず、専門家が用いる「反応を示すうなずき」について、専門家の「性」の主効果が有意であり（$F(1, 16) = 5.07$, $p < .05$）、「女性語」の主効果も有意であった（$F(1, 16) = 10.24$, $p < .01$）。交互作用はみられなかった。次に「反応を求める頭の動き」について、専門家の「性」も「女性語」の主効果も有意ではなく、交互作用が有意傾向であった（$F(1, 16) = 4.41$, $p < .10$）。交互作用が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行なったが、有意差はみられなかった。「視線」、「発言時間」については主効果が有意ではなく、交互作用もみられなかった。これらの結果をTable ５に示す。

考　察

患者役が評定した合意度について、実際の専門家によるコミュニケーションでも、男性と女性の性差において有意差がみられなかったことから、同性の専門家の方が合意を得やすいとはいえなかった。この結果は研究１と一致した。また、専門家が終助詞を用いて女性性を高めるよう操作し「女性語」を多く用いると、合意度は低下する傾向にあることが示唆された。これも研究１の結果と一致した。「女性語」は関係性を重視する言語とされているが、合意を得るために専門家がコミュニ

Table4　性差と女性語高低による患者役への影響
―専門家を実験参加者とし、女性語操作を行った場合―

要因			平均値	SD	主効果	交互作用
合意度	性差	男性	16.10	3.76		
		女性	18.40	2.27	1.86	
	女性語	高群	15.80	3.49		
		低群	18.70	2.31	3.53†	0.21
専門性の認知	性差	男性	21.70	4.76		
		女性	21.10	4.53	0.33	
	女性語	高群	20.00	5.23		
		低群	22.80	3.43	2.07	0.03

† p＜.10

Table 5　性差と女性語高低による専門家への影響
―専門家を実験参加者とし、女性語操作を行った場合―

要因			平均値	SD	主効果	交互作用
反応を示すうなずき	性差	男性	12.60	6.96		
		女性	18.70	3.95	5.07*	
	女性語	高群	11.80	5.22		
		低群	19.50	4.95	10.24**	0.76
反応を求める頭の動き	性差	男性	31.00	10.90		
		女性	32.30	7.41	0.12	
	女性語	高群	31.70	8.54		
		低群	31.60	10.06	0.01	4.41†
視線	性差	男性	80.60	15.01		
		女性	91.10	14.01	1.85	
	女性語	高群	82.00	14.59		
		低群	89.70	15.46	0.72	0.16
発言時間	性差	男性	91.00	19.75		
		女性	96.10	12.90	1.04	
	女性語	高群	98.80	10.25		
		低群	88.30	20.11	2.67	0.65

†p＜.10　*p＜.05　**p＜.01

ケーションを行うときに「女性語」を多く使用すると、受け手には情報伝達が消極的に映ることが考えられる。逆に、「女性語」を少なく用いることは関係性よりも情報伝達に重きをおいたコミュニケーションになるといえる。これらの結果は、クライアントから合意を得るためには、専門家の性差よりも専門家が用いる言語に表出するジェンダーに着目することの有効性が示されたといえる。

本研究では女性語のひとつとされる「終助詞」の多寡を操作して全体的に「女性語」を増減させたが、「女性語」全体と「終助詞」の機能には相違点があることが推測される。「終助詞」を少なく使用すると相手からの「専門性の認知」を促進することが指摘されているが（奥野・長谷川, 2008)、本研究では「女性語」使用の高群と低群の間で「専門性の認知」に差がなかったからである。この結果は女性語全体は専門性の認知には関連がないことを示している。「終助詞」使用の低下が伝達している情報の信頼性を上げる一方で、「女性語」使用の低下は情報伝達の効率性を上げることに関わるのではないかと考えられる。

実際の専門家によるコミュニケーションの性差に関しては、女性の専門家のほうが「反応を示すうなずき」を多く用いていることが示された。これは研究１の結果と一致した。しかし、「反応を示すうなずき」と「視線」を用いる時に、女性が言語、非言語両側面において女性性を高め、男性は言語、非言語両側面で女性性を中和する、という研究１で生起した現象は本研究ではみられなかった。実際の専門家の場合は、女性、男性の両方の女性語低群で「反応を示すうなずき」が増加した。この事態は、婉曲表現や丁寧な表現を少なくすることの補完として関係性を保つために「反応を示すうなずき」使用するといった、女性性を中和するようなコミュニケーションを女性の専門家も行っていることを示唆する。また、「発言時間」については研究１と同様に性において有意差がなかった。被験者が大学生の場合、「女性語」が多いときに「発言時間」は増加したが、実際の専門家ではその現象は発現しなかった。臨床現場に在職中

の専門家は患者との会話に慣れているということもあり、プロトコルには「えーと」「あのー」などの語尾を引き伸ばしながら間投詞を埋め言葉として用いることはあまりみられなかった。実際の専門家は、終助詞や付加疑問文、上昇調のイントネーションを使って相手に発言権を渡し、患者からの情報を引き出すよう働きかけていた。

合意を得るために会話を行った実際の専門家でも、研究１と同様に男性と女性の「女性語」の使用について有意差がなかったことから、専門家の女性は男性に比べて「女性語」を多く使用しているわけではないことが示唆された。

総合考察

合意度における性差と空間的ジェンダー

研究１、２の結果から、専門家役の大学生と実際の専門家の両方で、合意度について有意な性差がみられなかったことは、同性の専門家の方が合意を得やすいとは結論付けらない。つまり、女性専用外来などの性差医療の臨床現場では、専門家の見立てや治療方針などに納得してもらうという観点において、女性患者には女性の専門家の方が適しているとはいえないことになる。一方、専門家が「女性語」を用いて女性性を高めるコミュニケーションを用いると合意が得られにくくなることが示唆された。この結果から、女性クライアントが合意に至るには専門家の性差より、そこに展開されているコミュニケーションに表出される空間的ジェンダーに、より影響を受ける可能性があると考えられる。

これまで「終助詞」が「女性語」に含まれると述べられ、「女性語」や「終助詞」の存在は相手との関係性を重視する機能があるとされてきた。しかし、「女性語」の不在と「終助詞」の不在では相手に別の意味を与える可能性がある。「女性語」は発話全体の印象に関わり、「終助詞」は文末表現を左右する言語である。したがって、全体的に優しく丁寧な印象を与えながら、文末はシャープに言い切ることも可能である。女性性をある程度保ちながら丁寧に文末表現を言い切るといったコミュニケーションスタイルが専門家として魅力的に映るといえないだろうか。

これらの言語選択によるコミュニケーションの影響を、患者やクライアントが認知する専門家の「社会的勢力」[註2)]という視点から捉えてみる。「終助詞」の使用が「専門的勢力」（French & Raven, 1959）に関わり、「女性語」の使用は「魅力勢力」（今井, 1986）に関わるのではないかと推測できる。専門家が「終助詞」を用いないことは「専門的勢力」を高める可能性がある。一方、専門家の「女性語」使用の減少は丁寧で柔らかな印象を低下させるため、女性性としての「魅力勢力」（今井, 1986）を低めるが、ストレートで効率的な表現が男性性としての「魅力勢力」を高めることになるのではないだろうか。専門家が男性的な表現を用いることは女性クライアントの合意度促進に有効であるといえるかもしれない。また、「専門勢力」と「魅力勢力」の影響力は受け手によって異なるといえる。つまり、相手の話に合意するときに専門家として信頼することと人間としての好感度のどちらを優先するかについては明言することはできない。

専門家のコミュニケーションの性差
―言語的・非言語的側面―

コミュニケーションの性差とは空間的ジェンダーの表出にほかならないといえる。一般的な男女の

註２）「社会的勢力」とは、影響を与える潜在的な力のことである（大坊・安藤, 2001）。社会的勢力は５つ要素があり、①正当勢力legitimate power（行動に影響する正当な権力を持つ）、②専門勢力expert power（専門的知識や技能を持つ）、③関係勢力referent power（影響者に対して同一視させる力を持つ）、④報酬勢力reward power（報酬を与える能力を持つ）、⑤強制勢力coercive power（罰を与える能力を持つ）に分類された（French & Raven, 1959）。この分類に、今井（1986）は、“魅力勢力attractive power”（影響者との関係を維持していきたいと思わせる力を持つ）を追加している。

コミュニケーションの性差に関する先行研究は数多く報告されており、その特徴がコミュニケーションの中で女性性、男性性として作り上げられ、受け取られることになる。しかし、本研究における専門家役の大学生のコミュニケーションは先行研究と一致したわけではない。合意を得るために会話を行った専門家役の大学生で、性差による「女性語」の使用は有意差がなく、実際の専門家のコミュニケーションでは、さらに性差による差異が少なくなった。本研究の結果は、男女が平等な立場で参加する政治座談会で女性に「女性語」がみられなかったという、石丸（2001）の報告に一致する。Lakoff（1975）は、「女性語」は女性が社会的に低い地位に置かれていることを表出していると指摘したが、社会的地位が同等である場合は「女性語」が使用されなくなることが考えられる。また、井出（2006）が言語の性差を役割の差によるものであると捉えたことから、本研究では専門家の役割を担うことで女性の女性語使用が減少した可能性も推測できる。

コミュニケーションの性差は「女性語」のように言語的要素が強いものと非言語的側面がある。つまり、言語的ジェンダーと非言語的ジェンダーに分けて捉えることもできる。本研究では非言語コミュニケーションに表出される空間的ジェンダーの違いが明らかであった。話を聴いているサインである「反応を示すうなずき」は女性の専門家が多く用いた非言語だからである。したがって、専門的立場となり専門性が高まることにより言語的には男女差が減少しても、非言語的には男性より女性の専門家で女性性の表出がなされていることが明らかである。

専門家のコミュニケーションにおける空間的ジェンダーの活用

近年、若い世代の女性の話し言葉が男性の言葉使いに近づき、それは文末表現と敬語の使用においてみられることが報告され（小林, 1993）、男女の意識やコミュニケーションが「中性化」しつつあるとも言われている（湯川, 2003）。ジェンダーは状況、文脈、さらに時代とともに常に変化し、環境との相互作用によってつくられる女性性、男性性が時代の流れを反映しているといえる。このような時代の流れの中で有効な専門家のコミュニケーションのあり方、効果的なジェンダー表現を提示することは、より効果的なヒューマン・ケアを模索する上で重要である。ジェンダー表現は専門家が伝える情報の内容ではなく、情報をどのように伝えるかという側面である。つまり、空間的ジェンダーはマネージメント・コミュニケーション（長谷川, 2003）であり、相手との相互作用に影響を受け、影響を与えることになる。

専門家・非専門家間のコミュニケーションはリーダーシップ研究と共通項がある。Heller（1982）は、女性・男性リーダーが反対性の行動を取り入れることで肯定的評価を得ると述べている。この知見をコミュニケーションに適用すると、女性の専門家が女性性を、男性の専門家が男性性を表出することが相手にとって効果的ではないと見立てた場合、コミュニケーションにおけるジェンダー表出に変化を与える、という視点を持つことができる。たとえば、女性の専門家が断定を避ける垣根表現を多用することで相手が納得しにくくなり、さらに納得させようと丁寧に話すことで合意が得られなくなるという、コミュニケーションの悪循環をもたらす場合がある。こういった空間的ジェンダーの表現が状況や文脈に対して不適切なとき、女性の専門家が女性語を用いないことで男性性を高める、あるいは男性の専門家が反応を示すうなずきを多く用いて女性性を高める、というように空間的ジェンダーに操作を加えることでコミュニケーションの悪循環を断ち切ることが可能である。

臨床現場におけるヒューマン・ケアがうまくいかない場合に、これをコミュニケーションの側面

から捉え、それを変化させていくという視点を持つことができる。専門家が用いるコミュニケーションにおいて空間的ジェンダー表現を意識し変化を与えることで新たな状況や文脈が形成されうることは、患者やクライアントを支援する上で一助になると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では性と空間的ジェンダーの視点を導入し、専門家が用いる有効なコミュニケーションを検討した点は意義があると考えられる。しかし、専門家役の大学生と現職の専門家を被験者としたロールプレイ実験であり、実際の患者とのコミュニケーション場面を完全に再現したわけではない。また、胃潰瘍、高血圧という一般的な疾患に関する会話課題を用いたため、疾患名や病態水準が異なれば女性患者の態度も異なる可能性がある。

本研究では、女性のクライアントを対象にして検討を行ったが、専門家の性差（男／女）とクライアントの性差（男／女）によって４通りの組み合わせがある。今後は男女のクライアントの性差やジェンダーと、専門家の性差やジェンダーの相互作用を検討し、男女の専門家がそれぞれの状況で、空間的ジェンダー表出をどの程度行うことが効果的なのかについて明らかにする必要があるだろう。

文　献

天野恵子（2004）．性差に基づく医療とは―性差医学の概念と米国における発展―　ホルモンと臨床, **52**, ３-10.

東清和（1997）．展望　ジェンダー心理学の研究動向―メタ分析を中心にして―　教育心理学年報, **36**, 156-164.

Bateson, G.(1935)．Culture contact and schismogenesis. man, **35**, 178-183.

Bateson, G.（1972）．*Step to an ecology of mind.* New York: Brockman Inc.（佐藤良明（訳）(2000)．精神の生態学　改訂第２版　新思索社）

Cacioppo, J. T. & Petty, R. E.(1980)．Sex differences in influenceability: toward specifying the underlying processes. *Personality & Social Psychology Bulletin*, **6**, 651-656.

大坊郁夫（1982）．異性間のコミュニケーション行動の変化　日本グループダイナミックス学会第35回大会発表論文集, １-２.

大坊郁夫（1983）．男女の対人的コミュニケーション・パターンの研究　日本心理学会第47回大会発表論文集, 772.

大坊郁夫（1992）．会話事態における自己開示と対人的親密さ　日本心理学会第56回大会発表論文集, 227.

大坊郁夫（2001）．対人行動の社会心理学　北大路書房

大坊郁夫（2007）．しぐさのコミュニケーション―人は親しみをどう伝え合うか―　サイエンス社

Eagly, A. H. & Carli, L. L.(1981)．Sex of researchers and sex typed communications as determinants of sex differences in influenceability: A meta-analysis of social influence studies. *Psychological Bulletin*, **90**, １-20.

江原由美子・好井裕明・山崎敬一（1993）．性差別のエスノメソドロジー―対面的コミュニケーションにおける権力装置―　れいのるず＝秋葉かつえ編　おんなと日本語　有信堂高文社　pp189-228.

Exline, R. V.(1963)．Exploration in the process of person perception: Visual interaction in relation to competition, sex, and need for affiliation. *Journal of Personality*, **31**, １-20.

Exline, R. V., Gray, D. & Schuette, D.(1965)．Visual behavior in a dyad as affected by interview contact and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 201-209.

French, J. R. P., Jr. & Raven, B. H.(1959)．The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.). *Studies of social power*. Michigan: University of Michigan Press.

Hall, J. A.（1984）. *Nonverbal sex differences; communication accuracy and expressive style*. Baltimore; John Hopkins University Press.

長谷川啓三（2003）. コミュニケーションのマネージメント側面　東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要, **1**, 3 - 9 .

長谷川啓三（2006）. ソリューション・バンク―ブリーフセラピーの哲学と新展開―　金子書房

Heller, T.（1982）. *Women and men as leaders*. Massachusetts: Bergin Publishers Inc.

（矢嶋仁訳（1985）. リーダーとしての女性そして男性　頸草書房）

平田オリザ（2004）.「対話」してみませんか　NHK 日本語なるほど塾　日本放送出版協会

井出祥子（2006）. わきまえの語用論　大修館書店

今井芳昭（1986）. 親子関係における社会的勢力の基盤　社会心理学研究, **1**, 35-41.

今城周造（1984）. 情緒経験におよぼすリアクタンスの効果―漫画評価事態における検討―　心理学研究, **55**, 268-274.

石川いずみ（2006）. 夫婦・カップルにおけるコミュニケーションの問題に関する研究―「性差」という視点から―　東北大学大学院教育学研究科平成 17 年度課題研究論文（未公刊）

石丸暁子（2001）. 男女間のコミュニケーション―談話資料の分析からの観察―　教育と医学, **49**, 546-552.

伊藤公男・國信潤子（2004）. 女であることの損・得、男であることの損・得　伊藤公男・樹村みのり・國信潤子著　女性学・男性学―ジェンダー論入門―　有斐閣アルマ　pp. 1 -17.

伊藤哲司（1991）. 対人相互作用場面におけるユニット的ノンバーバル行動の特性　実験社会心理学研究, **31**, 85-93.

Karabenick, S. A.（1983）. Sex-relevance of content and influenceability. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 243-252.

小林美恵子（1993）. 世代と女性語―若い世代のことばの「中性化」について―　日本語学, **130**, 181-192.

越道理恵（2005）. コミュニケーションの性差に関する臨床心理学的研究―マネージメント側面に着目して―　東北大学大学院教育学研究科平成 16 年度修士論文（未公刊）

寿岳章子（1979）. 日本語と女　岩波書店

Lakoff, R.（1975）. *Language and Woman's place*. New York: Harper & Row.（かつえ・秋葉・れいのるず・川瀬裕子（訳）（1985）. 言語と性―英語における女性の地位　有信堂高文社）

Martin, S.（1975）. *A reference grammar of Japanese*. New Heaven, CT; Yale University Press.

メイナード・K・泉子（Senko. K. Maynard）（2002）. 会話分析　柴谷方良・西光義弘・影山太郎（編）日英語対照研究シリーズ（2）　くろしお出版

McGuire, W. J.（1968）. Personality and susceptibility to social influence. In E. F. Borgatta & W. W. Lalmbert（Eds.）, *Handbook of personal theory and research*. Chicago: Rand McNally, pp.1130-1187.

中島志保・佐藤明子・生田倫子・佐藤宏平・長谷川啓三（2001）. 機能的側面から見たマネージメントコミュニケーションの分類の試み　日本家族心理学会第 18 回大会発表抄録集, **26**.

中村桃子（2007）. 性と日本語―ことばがつくる女と男―　日本放送出版協会

奥野雅子（2004）. 説得場面における終助詞の使用が言語スタイルに及ぼす影響―非権力スタイルとうなずきに着目して―　日本家族心理学会第 21 回発表抄録集, **65**.

奥野雅子（2008）. 会話内容と文末表現の合意効果への影響力　家族心理学研究, **22**, 141 - 153.

奥野雅子・長谷川啓三（2008）. カウンセリング場面における説得的コミュニケーションの文末表現が受け手の態度に及ぼす影響―終助詞“ね”に着目した実験的研究―　産業カウンセリング研究, **10**, 12-21.

Rosenthal, R., Hall, J. A., DiMetteo, M. R., Rogers, P. L. & Archer, D.（1979）. *Sensitivity to non-verbel communication: The PONS Test*. Baltomore: John Hopkins University Press.

Tannen, D.（1991）. *You just don't understand; Women and men in conversation*. New York: Ballantine Books.

上野徳美（1999）. 説得的コミュニケーションに対する被説得性の性差に関する研究　実験社会心理学研究, **34**, 195-201.

内田伸子（1993）．会話行動にみられる性差　井出祥子（編）日本語学, **130**, 156-168.

宇佐美まゆみ（2010）．ポライとネスとジェンダー―隠されたヘゲモニー―　中村桃子（編）ジェンダーで学ぶ言語学　有斐閣　pp160-175.

湯川隆子（2003）．大学生のジェンダー認識―1970年代と1990年代の比較　柏木恵子・高橋恵子（編）心理学とジェンダー：学習と研究のために　pp.120-125.

Watzlawick, P., Beavin, J. & Jackson, D. D.（1967）. *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company.（山本和郎監（訳）（1998）．人間コミュニケーションの語用論―相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究―　二瓶社）